

## 「韓国福祉国家性格論争」

1997 年末以後、韓国では、IMF 危機にも関わらず福祉政策のラディカルな変化を遂げており、近年、その変化の性格を究明しようとする論争が活発に行われている。「韓国福祉国家性格論争」と名づけられるこの論争は、韓国ではこれまで皆無であった福祉政策に対する本学的な学術論争という点で大きな意味をもつ。

しかしながら、この論争が今日の韓国福祉国家が直面している問題を学問的に扱ううえで、じゅうぶんに生産的に展開されているだろうか。それに対するアプローチのしかたは各々の論者によって様々であり、それに簡単で一律的な評価を下すことはできないが、少なくとも、今日の論争については、論争の出発点からすでに、ある種の違和感や不毛さを覚えざるを得ない。なぜなら現在論争が行われている「国家責任強化か新自由主義貫徹か」という単線の二項対立構図からは、今日の政策変化の性格を的確に捉えることができないと考えるからである。

そこで本稿においては、(1)まず、議論のレベルで論争の構図やその問題点を明らかにし、現在の論争の構図からは政策変化の本質を究明しえないことを明らかにしたい。(2)そこで、次に論争が扱っている韓国の実際の政策的状況を、「生産的福祉」という福祉改革の基本構想を手がかりとして振り替えしてみることによって、そもそも韓国福祉国家が直面していた「市場経済化と福祉国家化の併行」という選択の状況を究明し、(3)最後に、韓国福祉国家に対する学問的探求をより発展的に展開していくためのいくつかの論点を示しておきたい。